

わが国における博物館型活動と地球環境科学への展開をめぐる—その3 —地域特性をどのように活かし,専門領域のバリアをどうのり越えるのか?—

濱田隆士

福井県立恐竜博物館, 放送大学, 日本科学協会

HAMADA, Takashi (2004) Museum activities of Japan and some developmental approaches to the environmental science of the Earth - Part 3—How to utilize the local characteristics, and how to manage the specialities of the fields—. Mem. Fukui Pref. Dinosaur Mus. 3: 65 - 82.

要 旨

総論として連載を企画しているので,主旨の理解を広く受け止めてもらうために,目次を章・節のレベルで羅列した.

1. まえがきに代えて —ゼネラリスト的立場・規則緩和施策,そして公益という大目標—
2. 地域における博物館・園等利活用の多様性 —ニュー・ミレニアム型博物館・園に関して—
 - ia 地球自然保全思潮の高揚をうけて —水惑星理解の新局面—
 - ib 地方分権と国公立諸施設の独立行政法人化
 - ii 知的公共サービス機能体と文化的公共メディア機構との関連
 - iib ハンズ・オン・エコツーリズムの着想と,“街かど博物館”の実態
 - iiia ローカリズムに基礎があってこそそのグローバリズム
 - iiib 自然系・理工系の発想・機構と,人文系・アート系での施策・施設との調和から新たな方向性を
3. 「Something New to Someone」をめぐる
 - ia “ゆるいつながり”のもつ思いがけない“新しい”特性
 - ib 考え方・着想の斬新性とその先見性,そして自律的発展性
 - ii “落ちこぼれ”への評価と教育特区問題
 - iii 総合的動態把握こそが,生態理解・展示の本質
4. あとがきに代えて —物事には,表と裏という“対立的”~“二律背反的”の存在が常道—

キーワード: 博物館・園等利活用の多様性,地球自然保全思潮,地方分権,“街かど博物館”,“落ちこぼれ”,不登校生,教育特区,総合的動態把握

第1章 まえがきに代えて —ゼネラリスト的立場・規制緩和施策, そして公益という大目標—

ローカリズム主導かそれともグローバリズム主導かを考えるときには,その地域特性を支えるコンセプトないしはビジョンが重要な鍵となる.専門分化が進む方向性は要素還元型発想に由来するし,ゼネラリスト的立場の意識は超領域発想あるいは俯瞰的視野につながる.博物館・園の規模・組織・構造・運営等に,このような二面性が大なり小

なり関わっていることは言うまでもない.地域特性が,そのどちらかに有利かという点をもまた無視できない.しかしながら,館・園の在り方には,そこならではの固有の観点を主張することが望ましく,さらに言うならばそこから出発して,いかにグローバル発想にかかわるか,という努力もまた重く問われることになるのであろう.

いましきりに変動している「構造改革特別区域(特区と略称)法」では,主として国公立の多様な局面での規制緩和をめざし,政令・通達等により115項目(2003年現在)の改正がなされる方向が出ている.2004年4月からは,それらについて,各方面での民活化をはじめとする多彩な局面での評価委員会等の発足が見込まれるという.そして,公益法人という立場から(財)日本科学協会での例でも明かなように,一般社会に広く浸透することが先決であり,公益法人学会もすでに立ち上げられているのである.

Fukui Prefectural Dinosaur Museum, Terao, Muroko, Katsuyama, Fukui 911-8601, Japan. E-mail: t-hamada@dinosaur.pref.fukui.jp; The University of the Air, Chiba, Japan; The Japan Science Society, Tokyo

がしかし、博物館・園や教育・学習の局面にはまだまだ多くの課題が残されており、今後のダイナミックかつ新規性の高い組織・運営が望まれることになる。関連省庁の深い理解と共に、旧来の慣習をのり超える施策が不可欠となってくる。組織の改革を稔りあるものにするには、それに当たっての意識の变革が必要であることは論じるまでもないが、実行に際して種々の困難を打破する努力もまた覚悟しなければなるまい。

第2章 地域における博物館・園等利活用の多様性 —ニュー・ミレニアム型博物館・園に関して—

ia 地球自然保全思潮の高揚をうけて —水惑星理解の新局面—

主として“公害問題”以降、地球環境問題が多様な形で捉えられるようになって久しい。公害という立場は、鉱害・工害・耕害・広害等々とイメージを重ね易く、発生源の企業や地域に対し住民等が告発をはじめとする訴訟・裁判

を通じて強く改善や補償を要求する、という社会事象を惹き起こした。言うまでもなく、当時は“知らぬ間の”たれ流し有害物質が、主として食物連鎖を経由しながら、遂には人命の尊厳に関わる事態へと発展したケースが圧倒的に多かった。事実認定や告訴の検証のためにしばしば係争が長期化したことが、様々な社会事件と目されたのである。

しかしながら、公害のかなり多くの局面は、そうした個別“事件”というより、むしろ公害発生源が特定できないより一般的な社会現象であって、被害を与えた方にも受けた方のどちらにも“責任が生じる”，というところまで広がってしまった。したがって、発生源を特定できない場合や“社会での”“日常的な”，しかも“悪の意識なく”展開していったものがいやでも多くなってしまった。これがとりもなおさず、地球規模での公害問題であり、一括して地球環境問題と呼ばれるようになった。

このような経験は、結果として“自然現象”へ大きな影響を与えることにもなった。CO₂ガスやメタンガス等の温暖化ガスによる地球大気～海洋の今までにないテンポでの

表1．水惑星における海域総合理解

		分 野 例	項 目 事 例
海 域 活 用	海 域	渚学 海域生物生産分布学	各種海岸，海流，漂砂，底層流，潮目，ナーサリーゾーン，ビーチコーミング，藻場，回遊，サンゴ礁域，ストランディング，プランクトン分布，潮干狩り
		海域構築物学 海面利用学	岸壁，防潮・防波堤，砕波構造，親水護岸，人工衛星データ，各種掘削リグ，運河，メガフロート
	空 間	海域物流学 海上輸送論	船舶運送，湾岸活用，海洋物流の効率化，海底トンネル，海底ケーブル，航行規制，船舶の安全性，海底地形と底層流
		マリンスポーツ学 海洋レクリエーション論	船のレクリエーション，海洋レジャー，フィッシング，潜水散歩・観察，タラソテラピー，水中展望塔，ホエールウォッチング，水族館
	海 域	生物海洋学 海洋底微生物学	多獲魚種，沿岸漁業，外洋漁業，深海生物，マングローブ漁業，森は海の恋人，漁業権，水資源問題，養殖技術，密漁，投網・曳網
		生礁構造学 マングローブ生態学	サンゴ移植，人工漁礁，生礁形成環境，生礁基盤，マングローブ植生，礁古生態復元，礁動態情報
		海洋底資源学 ガスハイドレート論	マリンスノー，Mn-ノジュール，ブラックスモーカー等，大陸棚油田・ガス田，深層水，深層淡水湧出孔，ガスハイドレート，バクテリア活用
	資 源	海洋エネルギー学 ウォーターマス論	潮汐，波浪，温度差，湧昇流，周極流，海流域，沿岸流，台風発生域，蒸散，渦流，太陽光・風力発電等洋上施設
海 域 保 全	海 域	エネルギー循環学 海面エネルギー論	地球温暖化，エルニーニョ，サンゴの白化，マントルブルーム，CO ₂ 固定，CH ₄ ハイドレート収集，エネルギー循環
		海洋生物動態学 海洋生物環境学	食物連鎖，階層構造，魚群探査，魚付林，群れの本質，ルッカリー形成，海鳥類の渡り，海の砂漠，酸素欠乏水塊，赤潮の発生
	環 境	海洋生物・化学 海洋底地質構造学	海水組成，生礁域，富栄養水塊，化学的生物群，海洋プレート，サブダクション，付加帯，大洋底帯磁，中央海嶺，海嶺・海山
		海域汚染学 不法海洋投棄論	生体濃縮，自浄作用，長期残留毒物，赤潮被害，重油類流出，一般漂流ゴミ，漂着プラスチックペレット，核開発冷却水（熱汚染）
	海 域	海洋保全学 海域マネジマント	シーレーン，海守，海域出入国管理，汚染度測定，漂流物調査，海象モニタリング，航行の安全性，真水の確保
		海域立地論 ウォーターフロント学	社会性海浜構造物，海水浴場，ビーチスポーツ，海水利活用施設，レジャー施設，淡水プール
		海域政策科学 排他的経済水域論	大陸棚資源評価，国際海洋法，海域安全管理，長大流し網禁止，漁獲量規制，水域関連諸条令
	政 策	海洋教育・学習論 海域モニタリング学	総合学習としての海域，海洋科学関連分野群，海洋に関する知識と知恵，海洋基本調査，海洋・船舶教育の普及，海域関係モニタリング，博物館活動

温度上昇がそうであり、またフロン系ガス等によって惹き起こされたオゾン層破壊が好例とされる。その結果、「自然を大切に」とか「緑化運動」という一般市民による様々な形式が広くとられるようになった。つまり、個人レベルから企業、施策まで多彩な取り組みへの展開がみられる事態へと変わってきたのである。社会～地球市民というべきであろうが～に、明確な地球自然保全思潮の高揚が始まったのである。

しかし、政策や方針については、理想的であっても、具体的な対策はなかなか軌道にのせるところまで達していないまま、ニュー・ミレニアムの入口にまで来てしまった、という認識を誰もが持っている、と言って差し支えあるまい。その原因としては、著しい人口増加（人口爆発）とヒトの欲望は一度高まってしまうと容易に後へは退けない、といった“心理的”～“本能的”傾向を無視できない文明化の急速な進展があり、これまた大問題であると指摘する向きもある。

科学技術の目ざましい発展や、それに伴う多彩な文化・文明活動にとっては、明かにヒト社会の性であるといっても良い一つの不可逆過程と理解することさえできよう。といって、文明化をこのまま放置するなら、地球自体の“老化”が進むことは誰の目にも明かであり、今からでもより抜本的な社会構造改革施策を打ち出さねばなるまい。

東北日本での水産業関係者からの発言に、「森は海の恋人」という強烈なインパクトを持つ“緑化推進運動”があり、予想を超えた注目と期待が集まってきている。わが国には、古来「魚付林」という慣しがあって、海岸林の有効性を上手に表現した言葉となっているが、それを一層広く発展させた、地球環境施策の一つの柱と位置づけられてもよい。ここにおいて地球は基本的に一つの巨大環境であり、かつまた複雑体をなすものであって、「海」とか「森」「河川」といった狭い視点からは問題解決に至らないという、広域的視野～俯瞰的視座の重要性が深く認識されることになる（濱田，2002c，d）。

地球の表層には、その70%強を占める海洋があり、水は天下のまわり物として高層大気から雲・雨等として大地を潤し、地下水を涵養してあらゆる動植物の生命を支え、かつまたマグマのような高温物質はおろか、地芯に至るまで水分「 H_2O 、 OH 等」を含んでいることがとくに近年明かされてきている。すなわち、水惑星地球像の認識と理解が、この全ての地球環境のもとになっているのである。

それ故に、身近なところとしては“水管理行政”にも、新河川法、新海洋法、新港湾法、新森林法等が制定され、“複雑自然系—人為システム”にもメスが入られるようになったことは、一つの社会変革の在り方として是認されるべきであろう（濱田，2001d）。ヨーロッパでもスイスやドイツでは、先がけて「多自然～近自然工法」を採用するケースが広がってきている。環境立国をもって自らを認めているドイツでは、つとに動植物の生態を調べあげて自然マップを作成し、それに基づいて高速道路等で失われた生態を“ビオトープ”と呼び、自然保全に対して手厚い配慮をしている。わが国での学校や企業敷地内での小手先だけの“池造り”とは、発想からして全く異なっていること

として注目しなければならない。

ib 地方分権化と国公立諸施設の独立行政法人化

さて、ここで博物館・園を含め、公共施設や高等教育組織等について若干ふれておく必要がある。

国の施策としての主要な柱の一つに、地方分権化が位置づけられている。政治・経済・学術・企業・文化等のいずれにもその重みが分けられるよう様々な提案がなされ、かつ順次実行に移されつつある。とりわけ、国公立諸施設の扱いについては、独立行政法人化が矢継ぎ早に進められており、中でも国立科学博物館や国立美術館、国立青年の家等々に関してはその先鋒を狙うことになった。

国立科学博物館について、具体的に言及してみよう。国立科学博物館にあっては内部評価委員会が、そして外部評価委員会が文部科学省内におかれ、それぞれが中・長期目標を定めて鋭意作業に当たってきている。評価には、数値目標を掲げるケースと、質の評価に重きが置かれる場合とがあり、議論としては前者にやや偏りがちではあるものの、博物館には付き物の質的な役割も決しておろそかにはできない。

短期評価としては、一つ前の年度との比較によって成果が評価される仕組みとなっている。しかし、博物館が本来持っている“資料（標本や図書）”については、一度何らかの理由（寄贈・交換・購入等）によって成績が上がり、その時点では真当な評価になるとしても、次年度との比較に関しては実質的に数値化だけでは扱いようがない、という現実的な矛盾を抱えている。何年間かの平均という策をとるとしても、非常に割切れない思いを残すことになる。

評価には様々なタイプや方式の査定が必要であることは言うまでもないが、“人によって”という拭い難い局面もあり、決して安易に査定結果を鵜呑みにできない事情も多く発生する。国外では博物館としての評価の歴史が長いので、この点、わが国での不馴れが突出することになる。数的評価と質的评价が混在する今の日本での、“文化的世界”としての一つの宿命であると言えるのかもしれない。

公立公共施設である、東京都立の諸博物館・園についても同様な宿命的側面を忘れることはできない。例えば、全体としてかなりの“評判”を得ていても、何かの理由でCやDのランクが付けられると、その回復には相当の努力が必要となり、ときには廃止という厳しい査定を受けることにもつながった例も出ている。入場者・入館者数が、ふつうそうした評価対象の“好例”とされるが、実は人数ではなくて、展示面積・展示件数・滞在時間・質的评价等を総合的に勘案したものでなければ、廃止等が決定される場合の説明責任を“文章”や“数値”で済ますことはそう易いものではない。

また、仮に博物館・園が廃止・中止に至ったとして、その組織が“所有する財産”の処分に関してはまた別の措置を必要とすることになり、そうした場合、合併～新設あるいは施設の改善・拡張について経済的な面で果たして帳尻が合うのかどうか実に疑わしい。まして、それらを利活用

してきた住民主体のヒト社会が失うデメリットはふつう考慮されないであろうから、ユーザとしての“被害者”の立場も重要な要素となってしまう点も無視できない。

施設や機構が独立行政法人化されるとき、それによってメリット・デメリットの査定判断が下され、しかも実質的に被害が少ないとみられるのが“元”政府機関の場合である。かつての海洋科学技術センターがそうであるし、旧科学技術庁スタッフが実質的なハンドリングをしている日本科学未来館などのケースが、ほぼこうした事例に相当するのであろう。いずれの機構・組織も一応様変わりを果たし、またそれ以上の新しい施設・設備・スタッフの充実を得て、新しい活力の元となっていることは言うまでもない。

これからも次々と変革が期待されている一般の国公立博物館・園については、あくまでも数的評価と質的评价のバランスをいかに上手にとるかで“運命”が決まる、といって過言ではあるまい。極めて専門的な分野に特化したものもあれば、より一般化・普遍化を旨としたものもあり、一様な評価態勢では決して十分な結果を出し難いことだけは確かである。

iiia 知的公共サービス機能体と文化的公共メディア機構との関連

2001年に発足した省庁再編に当たって、文部科学省では文化庁を存続させる一方、科学技術庁を廃止すると共に、社会教育関連部局の筆頭局に生涯学習局を新たに設置する大英断を下した。そして、その中核を担う部局として博物館担当を置き職員を複数配置したのである。それまで、博物館関連事業は社会教育局に含まれていたから、この部門の独立はまさに特記に値すると言えよう。

ただ、わが国の博物館法自体には未だに変革の手が及んでいないため、制度的な整理に踏み込むことができないまま、運用によって社会的認知を広げる努力が重ねられている。毎年のように文科省が補助事業を発案し、年間数億円というレベルではあるが、博物館・園やそのアクティビティを支援するアクションプログラムを走らせていることは、それなりに認められてよい。

日本博物館協会は博物館の登録団体であるが、文科省はこのような立場からの協会支援にも意欲を燃やし、海外実情調査や文献紹介事業を介して活動していることもまた注目される。このような支援事業の特徴として、都道府県等の公的行政の枠を外し、特設した博物館協議会（期限付）で資金援助を実現化し、例えば関東一円では都府県など行政の壁を越えて緊密な協力態勢をとりつつ、それらをまとめた報告書等にもかかわり、それなりの成果を挙げてはきている。

こうした知的公共サービス機能体が、一定のアクティビティを介して地域への貢献と、異地域との交流を深める機会が得られるようになったことは、それまでのむしろ“個別での”連携があまりにも深かったことを想うと、まさに画期的ではある。さらに、地域周辺の学校組織（総合学習のクラスや地域特性の掘り起こしグループなど）を中心と

する文化的公共メディア機構との密接な関係を、一時ではあるとしても持ち得る経験を経ることの意義も小さくはない。

そもそも、博物館には自然（史）誌館的なものから工学・技術館的なもの、さらに動・植物園から水族館類、そしてあらゆる分野に広がりを持つ美術・歌舞・演芸の局面から日常生活文化・農漁村文化・考古・歴史文化等々に亘るジャンルが拓かれており、実是一種の複合系社会を形成しているのである。したがって、これらの諸機構が互いに連携し合うなら、後に述べるような文化的公共メディアとして、これまでにない状況が現出するであろうことは十分に期待される。

こうした分野・地域の特性を活かした知的資源は、これまで“単発的”にしか活用されていなかったとみることも一面では可能であり、それらの有効な利用・相互作用には全く新しい方向が出てくるに違いあるまい。それらについては、また別の視点から例を挙げることにする。このような社会事情は、制度学級組織では正しい対応が不可能であることは間違いなく、インフォーマルな学習意識とバリアフリーの立場からユニバーサルな視点にまで枠を広げることが必須、ということになるであろう。

なお、ここで一寸脇道にそれることになるが、国公立の教育行政の中に位置づけられている種々の階層での「教育委員会」なるものの機能とか権限・役割等にはあまり明確な哲学がなく、例えば、教育委員長を任用するにも非常にドラスティックな見解がとられることも屢々である。また、文科省の所管であるような場合やそうでないケースもよくあり、一般人や博物館・園機構とのつながり方にも多様性が大きい。このことは、21世紀での教育改革特区を拓く際の一つのターゲットに十分になり得よう。

ところで、博物館・園の構造・組織・運営は言うまでもなく知的公共サービス機能体であり、その活動範囲は前述のように極めて幅広い。そして、結果としての文化的公共メディア機構も当然のことながらその幅広さを、一般地球市民にいかにか上手に伝えるかという役目を担っている。博物館・園から発信される知的公共事業は、ダイレクトには来館者・入園者等に伝わるが、間接的にも機能を発揮する多くのメディア機構が存在する（濱田、1994、2001a；瀬名、2001）。

公共メディアの代表としては、ふつう集中的に報じられるテレビやラジオの機構があり、主として動画型・物語～解説風にまとめられているから、主題を理解し易いという利点がある。これに対して、いわゆる電子媒体としてのITでは、とどのつまり機能をアップした“読み書き・算盤”のレベルであり、一種のバリアフリーの世界でもあるから、正式のクレジットに欠けることが多く、チャットなのか提案なのかの判別すら難しい場合も多い。加えて極めて度々バーチャル世界とまぎらわしいため、信憑性に欠けることもまた少なくない。

他にペーパー媒体や静止画媒体、模型、ジオラマ～レブリカの世界が拓けてはいるが、基本的には3D性に乏しく、できたとしてもCGでのバーチャル世界に踏み込んでしまうこともままあるので、展示品との直接対面でのよう

な実体性を欠く恨みはある。近年、錯覚など心理面に着目した3D型画像もあるが、未だ途上の感が強いことは否めない。

博物館・園の展示や景観のように、実態や情景を目の前で体験的に捉えられるメリットについては、他に比肩するものがない、と今の段階で断言できるのは理解されるところであろう（濱田，2000b；Orna and Pittitt，2003；田中，2003）。実物や野外体験に優るものはなく、メディア機構は畢竟メディアとして、例えば導入的知識の把握レベルに留まってしまうのである。

iib ハンズ・オン・エコツーリズムの着想と、“街かど博物館”の実態

ハンズ・オン（hands-on）という語は、ヨーロッパ文化圏において半世紀以上も前に提案されたもの、という長い歴史がある。その当時“触れただけで何が分かる？”とい

う批判的意見が出て、間もなく社会から無視されることとなった。この言葉が、アメリカのチルドレンズ・ミュージアムを中心に見直されて、ハンズ・オン・グッズが経済的にも成り立つようになった1990年頃を機に、一種の流行語として定着するに至った。

わが国にあっては、そのような経験を知らぬまま半世紀以上が過ぎ、放送大学でも「ハンズ・オン」を全く聞いたこともない、とする教官層が今でも圧倒的に多い。そこでごく近年ハンズ・オンについて、身体に障害をもつ人々のうち“視覚障害者”と呼ばれる方々やその介助に当たる方々を対象としてクラスを開いたことから、ようやく認知されるようになったいきさつもある。丁度その頃、日本の博物館館長会議においてさえ、それに近い認識状態であったことを思うと、博物館・園関係者がいかに実物に触れる機会を持つ努力をしてこなかったかがよく理解できる。

その原因としては、わが国においてはむしろ“体験・体感教育”という言葉の方がより定着していたとする向きも

表2.“花とみどり”事業の事例（ ）内は長期構想

		ア イ テ ム 例
“奇跡の星の植物館”活動が生み出すもの	研 究	香草類，稀産・奇観植物，環境指標植物，巨大化植物，植物資源の適正配置， 共存・共生の在り方 ，絶滅危惧植物の保全策，拡大する移入植物対策 〔遺伝子バンクの拡充，植物同士のコミュニケーション〕
	産 業	クローン植物，特定品種の量産計画，品種改良の展開，リゾートエリアの整備，コンベンション産業，江戸情緒再現，地域特性景観の整備， 感動産業の一環に 〔環境制御での低温栽培システム〕
	楽 修 (エデュテインメント)	五感(官)を活かす体験，学校教育とのバランス，博物館活動の主題として，花と緑のイベント，“土”にまつわる楽修活動，植物と民俗特性， 主体性は来館者に！ 〔水族施設との連携，根の植物館展示〕
	サービス	子供達との情操楽修，環境を活かしたトータルリゾート，植物関連資料の公開，情報伝達メディア技法の向上， 公益性の重視 ，淡路特産品ショップ 〔花と種子の多様性館，“食性と植生”展示〕
“奇跡の星の植物館”活動がもたらすもの	環 境	雰囲気づくり，季節感演出，森林（雑木林等）の再生，都市の緑化促進，世界の宗教・文化と植物， 渚環境（漁業を含めて）の整備 ，趣味の輪を広げる，鳴門の渦 〔海浜植物館，渚の生活モデルビレッジ〕
	健 康	森の緑政策とO ₂ 供給，緑の癒し系，美しさ・愉しさの価値，老人・不自由者への配慮，フレグランスプロムナード，心の健康， お年寄りがお年寄りを世話するしくみ 〔漢方薬百科の充実（展示コーナー）〕
	交 流	ガーデニングの楽しみ， ハンズ・オン体験交流 ，知と智の交流，ボランティアの役割，協同作業の効用，花と緑の街づくり，花と民俗資料，仲良くなる秘訣，気持の良いパーティ 〔国際交流，国外研修等〕
	感 動	創り出す歓び，見て聞いて感動するうれしさ，不思議の発見， 野外作業での感激と創作意欲 ，自然界での絶妙のバランス，感動産業の一環を担う自然への畏敬の念 〔原産地植物と改良種マップ，木質化植物の秘密〕

あるが、制度教育のカリキュラムにさえ、ハンズ・オンの発想は実験・実習時間の形式的な設定と相俟って、やはり定着する余地がなかったように思われる。そうした中で、地球全体として自然界をもっとよく見つめようというモードが、環境問題と同じ対応をきっかけとして湧きあがり、実物体験・野外実習・室内実験等々、所謂ハンズ・オン型手法が見直される時期を迎えた。アメリカでの例でも、その頃から高い意識を持つ人々の間で理解されるようになった、という社会事情の変化も見逃せない。

加えて、ハンズ・オンという用語自体の“拡張解釈”がそれとなく広がり、決して“手で触れる”ことに留まらず、「手は頭の道具」とさえ解されはじめ、さまざまの“技法”や“手法”までが一括して幅広くハンズ・オンと呼ばれるようになったいきさつもある。野外見学もそうであり、かつての“宝物殿”型博物館が貴重で手で触れるどころか写真にも撮れず、限定機関にのみ御開帳という、永年の“エリート志向”がバックを支えていたことへの明らかな反動が顕在化したとみてよいであろう。

ハンズ・オンにはこうした経緯があり、わが国では未だに邦訳が定着していないという事態もある（濱田，1999b）。博物館はもちろんミュージアムなのであるが、この場合も日本語の博物館は、輸入学として日本に持ち込まれたもので、博物学とは若干ニュアンスを異にする傾向があったことも否めない。ミュージアムを、外国並に“愉しむ”という雰囲気やなかなか体感できないとする、感覚面での深層心理学的バリアに類する局面すら存在したこともまた、見逃せない“社会事情”であったろう（遠山，1981；山崎，1991）。

さて、そうした“近代化”におくれがあったなか、エコロジーという言葉が地球環境を大切にとする思潮を原点にして広まり、エコ（家庭、生態、経済）なる言葉もまた邦訳に適しているという捉え方からやや外れて、そこにエコ・ツーリズムという新しい概念が生まれたことにも意味がある（Honey，2002）。つまり、生態学的観察旅行という固い訳語ではなく、エコ・ツーリズムには景観を愛で、癒しの体験をしながら旅行を愉しむ、学習する、というはるかに多彩な局面が拓かれてきているからである。これは自然や社会が複雑系の最たるものであり、決して要素還元型発想ではない立場にある、と一般地球市民が広く理解を示す社会事情の新しい、いうなれば21世紀というニュー・ミレニアムへの出発点に立つとの評価と認識が生まれてきたからに他ならない。まさに単なる観光旅行・形式的修学旅行からの脱却であり、ある意味で「文化的」姿勢の確立を目指していると評してよいのではなかろうか。

“エコ”という言葉は、たしかに邦訳しにくく、むしろ外来語として国際的なニュアンスと捉える方が良いかもしれない。“何でも日本語で”という主張には、グローバル化とむしろ逆行するセンスが大きすぎて、決して近代化にはつながるまい。ミュージアムと博物館との言語上の問題が同じような関係にあるとあってよいのかもしれない。ただ、博物館が博物学と同源であるとするには、ミュージアムとの関係を新しく整理する必要があるから、現行の“博物館”類に、エコ的にミュージアムと名付けられるケ

ースが増えてきていることと、並行して検討を要する事態が早晚訪れるのであろう。

そうした意味を考慮すると、いわば社会事象として“伝統”に傾斜した“古い”歴史をむしろ重視する“街角博物館”には、それなりの意義も理解できそうである。エコ・ミュージアムと表現することも可能かもしれないが“古風”の雰囲気や味わうことに意義を感じてもらえそうな私的な日常語の“お店”や、“屋敷”を“街角博物館”と呼んで位置づけることには、それなりの価値も出てこよう。登録博物館には見出せない“博物館”であり、館長も学芸員等もいず店長と店員というシンプルな関係であることに間違いはない。といて、博物館協会で“公認”してほしいとか、“公認”されていないから、という差別扱いには余り根拠がなさそうである。

わが国での“街角博物館”型存在は、まだ決して全国普及とまでは行っていないが、神奈川県小田原市での例を参考にしてみよう。県立生命の星・地球博物館という公立の自然誌型博物館が小田原市にできた頃から、市では住民の中から“市民博物館”的なものを考えたら、という意見も出ていた。これを加速度的に展開させることができてたちまち10件を超えるようになってきた背景には、小田原という土地が、規模としては江戸城より大きな小田原城の城郭域に広がっていた、かつての武家屋敷・商家の集合体である、という伝統を背景にしていることは明らかである。

そういう意味合いからすると、小田原流に言う“街かど博物館”こそが市民意識の高揚を示す“良い例”と位置づけられることが可能であろう。伝統という点では市内には寺社も数多く、古い商家も沢山あって、“城下町”の名残りであるとする理解もできよう。こうした歴史と風物・産物を手厚く腰を据えて運営している人々と、制度的には学級と呼ばれる近代の総合学習とが有機的に結び付く可能性は、決して小さくはない。小田原市を中核にしたある意味での歴史・故事・景観・風習等とまだ多く残っている“自然的”情景などを、いかに有為に関連させ、さらに公的博物館やその周辺に県域を越えた広がりや自立的運営が盛んなWESKAMS（神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会＝地域の博物館長・園長レベルの会：後出，p.75）とが、より密接に絡む可能性も決して馬鹿にはできない。こうした中に、特区と呼んで差支えない要素が発生してきていることもまた大切であろう。

iiia ローカリズムに基礎があってこそそのグローバリズム

日本の博物館・園では、つい最近まで「地方博物館」とか「地域博物館」と呼ばれることに大きな抵抗を感じる向きが多く、事実それを露骨に表現する館・園関係者がいたことは、まぎれもない残念な社会情勢であった。しかし、地球という大環境を、「たった一つの」という冠をかぶせてこの“生物の棲める水惑星”と理解できるようになってから、事態は一変した。

地方には地方・地域の特性があった。その地域にこそその名を冠した博物館・園であることに自負の念を抱くところが、雨後の筍のように輩出してきたのである。地方・地

域に対しては、その“特性博物館・園”の活動範囲をよく表わしている“グローバル”センスを保有する、あるいは展示・解説をする世界観が、本格的に定着しはじめたからである。実際には、地球とかグローバルという名が使われることはなくても、その運営には広くて大きな視野がもたれるようになってきた。

博物館・園にはもともと非常に幅広い分野スペクトルがあって、専門から遊びまでの幅広い活動領域が含まれる（濱田，1999a，2002d；岩槻，2003a，b；奥野，1999，2003a，b；奥野他，2000）。それらを一括したり総合したりしようとする努力は、館・園内での動きとしてはそうであったとしても、なかなか実現し得ないものであることは云うまでもない。例えば「地球博物館」とか「銀行博物館」あるいは「総合博物館」や「統合博物館」等には本当のセンスはなかなか盛り込めないし、また事実上存在し得ないであろうからである。

逆に考えてみよう。グローバリズムに焦点を絞った“分野博物館・園”が成り立たないとしたら、むしろ成立させることが容易な、身近な博物館・園で良いと考えるべきではなかろうか。もちろん、その中身には、「大から小へ」のセンスで、宇宙の広がりからDNAや素粒子の世界までをとり上げることが十分に可能なものであり、そこにこそ、グローバル・センスを発揮する力量が問われているといつて過言ではない。

例を再び小田原市にとってみよう。神奈川県にはもともと横浜市という中心街に、総合博物館的な、歴史と自然とが一つであった神奈川県立博物館が30年以上も前から置かれ、それに相応しい活動もなされていた。当時の建物は、ある銀行の石造りで指定記念物にもなっており、訪れる人も少なくなかった。しかしながら時代と共に進んだ“地方分権”の発想は、限定された面積の中でそれをどう扱うかで課題が重くなり、結局平成7年（1995年）になって、横浜に歴史博物館を、そして県西の小田原市に自然史（誌）系をとという分化が実現し、小田原市に“通称”としての「生命の星・地球博物館」という“名は体を表わす”ことを軸においたネーミングが、自然史（誌）博物館という“正式名称を超えて”与えられることになった。したがって英名では共に「Kanagawa Prefectural Museum」であり、“横浜での県立博物館”が歴史系を、“小田原市でのそれ”が自然史（誌）系を、という大分野担当館へと変身を遂げていったのである。

こうした2分野博物館が県立として成り立つのは、決して珍しいことではない。いずれの館にも、歴史と事実を重んじる風潮は依然として残されてはいるし、世界、地球と地域という観点もそれぞれ十分に機能させることができているのである。敷地さえ保証されれば、宮崎県の県立総合博物館が再編統合という主旨を十分に活かした単一地域に置かれたことや、徳島県のように一つの敷地で自然系や美術館など複数館を持ち、全体として博物館群を形成させた例もあるし、福井県のように、一つの県立博物館が歴史系と自然系（恐竜博物館）に分割された事例もある（濱田，2002b，2003）。私立では、静岡県のように海洋館、自然館、人体館等を一つのキャンパスに置いていた場合す

らある。

いずれのケースにしろ、日本という狭い国土では、何か大きなものを、と考えたときにいつも課題となるのは面積事情であり、分野統合とは違った考え方で事に当たらねばならない“悪条件”をかかえている。これを解決する方法には、北九州でのように、国立九州博物館と隣り合う形で市立の自然史館、歴史館等を、元の港湾域に新たに統合してミュージアム・フェデレーション（博物館連合）的な構造を形成する素地など、近年の動きが生み出され、そのアクティビティにも活性化が期待されている。

やや幅広い話題に偏ってしまったきらいがあるが、日本は“伝統的”に公共施設としての博物館・園造りに熱心であり、国公立はもちろん私立、企業立、事業関連団体等が主となるものなど、企業の大小は 물론 専門分野にあつてさえ実に多様な様相が存在し、決して規模が小さいから、という理屈は通らない。小さければ小さいなりに、地域特性を十分に活かしたテーマを選び、それで十分に（経済的なことは別として）運営できるのである。たった一人の美術家の名を冠したネーミングもあれば、ごく限定されたローカルネームに物珍しさを強調する分野博物館まで、多種多様のものがあることも強調してしすぎることはない。いずれも、しっかりとした目的とビジョンをもっているからである。その最先端に、前出のように本当に地元と密着した、生活形態そのままの“街角博物館”が非登録として存在しうることにもちろん大きな意味がある。

iiib 自然系・理工系の発想・機構と人文系・アート系での施策・施設との調和から新たな方向性を

わが国では、国を代表する博物館組織として国立科学博物館が発展してきた。東京博物館時代には、輸入文化としての博物館の先がけを狙い、どちらかと言うとありとあらゆる自然史（誌）系の標本・資料をnational collectionとして蒐収しその一部を展示に当ててきた。いうなれば、博物学的発想、それも静的な社会経済の参考資料としての展開に重点が置かれていた。

その後、度重ねての世界大戦や関東大震災を経験し、さらに終戦直前・直後には兵舎の役割りまで果たす運命をたどったあと、結果として古色蒼然たる、黴臭い陳列と揶揄されているところまで変わり果てた。そして終戦時には兵達の乱暴は極限に達し、貴重なコレクションを収納していた棚類が木製であったことをよい事に、それを解体し暖をとる行動に出たという。その頃の中庭には、世界各地から集められた岩石・鉱物・化石の標本が放棄され、山ができていた。その後片付けには小生も含めて中・高生が、そして常勤も非常勤の人々も共に加わって大変な苦労・努力が注ぎ込まれ、幾分かの判定不可能（種はともかく産地という大きな基礎データが消えてしまうなど）の部分を除いて、ようやく元の状態に立ち戻らせることができたのをよく記憶している。

そのような、いわば廃墟の中から、国が威信をかけて収集してきた多種多様の標本類は辛うじて生き残り、それと共に屋上に設置されていたドームを使った天体観察も頻繁

に行われるようになったのであった。そして度重なる組織の拡大・施設の拡張を経て、モニュメントとしての“近代科学技術”の粋と見なされた“小型”ロケット（ペンシル型から急速に発達してきた典型として）や大型鯨の剥製屋外展示など、“外から見える目玉”が登場するに至ったの

である。その頃から、工学館的な展開も並行して企画・実現へと向かい、建物としては敷地の制限や旧い建物を壊すよりは、という考えが優先させられて、現在もまだ拡張は続けられている。

つまり、国立科学博物館は、理・工学博物館としての“制

表3．博物館・園・ホール等の広がり

		分野・施設等（主な事例）	アイテム等（主な事例）
自然系	専門自然系	自然系専門分野博物館 資源系博物館 天文・宇宙館 水・河川等博物館 “Eggs Museum”	地球、地質・地形、鉱物・岩石、化石・地層、惑星系、太陽系、銀河系、宇宙、宇宙構造、宇宙遊泳、宇宙実験、人工衛星、不可視伴星、宇宙の広がり、スペクトルのドップラー効果、鉱産資源、隕石、月、エネルギー資源、生態復元、地球物質循環、火山・地震、マントル・プレート、ブルーム、惑星の成層構造、インパクトクレーター、衝撃鉱物、CO ₂ 循環、NH ₄ ハイドレート、リサイクル、利水・利雪、重力生物学、源流・ダム、全天周視野、星座、水・河川、湖、海、卵（化石も含む）、進化（マクロレベル）
	情報自然系	動・植・水族博物館・園 自然公園 国立・公立公園 世界自然遺産 天然記念物（日本・指定）	動・植物資料、植物・森林生態、進化（マイクロレベル）、サンゴとサンゴ礁、貝類、魚類、鳥類、ストロマトライト、自然保護区、エコツーリズム、レンジャー、エデュテインメント、自然保全思想、地勢、バクテリアの役割、分解者、生産者、消費者、自然界のバランス、生態システム、飼育法、土壌の生成、シンボリック的存在、景観と名所、サンクチュアリ、自然観察路、水域環境、深海生態系、ヒエラルキイ、絶滅危惧種、有毛恐竜
	総合自然系	大学付属博物館 地球系科学博物館 生命誌・人体館 “総合的博物館” ジオラマ・生態展示館	生き物、自然、人体・宇宙の生命体、生命誌、標本登録・管理システム、古生態・生態展示、DNA構造とその応用、学問の壁を越える努力、個別科学への反省、ナショナル・コレクション、生涯学習、総合学習、俯瞰的視野、展示・広報活動、地域住民との交流、生態系展示、極相林
漸移系	技術情報系	エキスポラトリウム 未来館 私のしごと館 産業博物館 交通・通信系博物館	科学体験、ハンズ・オン思考、実体験、宇宙と生物、揚力・浮力、微重力世界、適性発見、車のしくみと効率化、科学技術革新、最先端科学、列車・新幹線、移動体システム、ディスプレイ作業、TV・IT技術、街道史、省エネシステム、産業考古学、くすり博物館、薬草・香草（フレグランス）実物展示、専門解説、虚構展示
	楽修啓蒙系	科学未来館 チルドレン・ミュージアムズ こどもランド・遊戯施設 市街地公園・遊園地 ペットふれあい公園	ユニバーサル・ミュージアム、夢の世界、幼児学習、原体験、生きていることの実感、運動体験、関心と興味の源泉、娯楽、ペット・愛玩植物、各種遊具、優しさ、感動、癒し系、アミニズム、各種乗り物、科学おもちゃ、ロボット各種、リーダーズ、制度教育との連携、体感
人為系	郷土考古系	歴史・民俗博物館 歴史的建造物 考古系博物館 世界文化遺産 アーカイブス保存施設・古文書館	生活文化資料、風習・習慣、歴史上の事物・事件、民俗誌、地域文化、歴史観、王朝・武士への崇拜、古代史、考古・歴史編集、武具類、偉人伝、遺跡・建物・遺構、追憶・追悼、寺社構造、墓地、記念碑、トーテム、人権・民権、ホロコースト展示、歴史的景観、アーカイブス、冠婚葬祭
	伝統工芸系	美術工芸館 民具・伝統玩具館 骨董展示館 写真展示館 趣味のコレクション展示	焼物、古典什器、古民具・民芸品、伝統工芸、美的感覚、著名人記録、伝承・伝説、コラージュ、アート作品、CGアート、記録物、伝記物、古本、ポスター類、十二支グッズ、星座シンボル、ニワトリ・フクロウグッズ、犬猫グッズ、漆器類、恐竜グッズ、おもちゃコレクション、国宝、文化財、アーティスト作品
	実践芸能系	能・歌舞伎舞台 神楽舞台 オペラ・ミュージカル・コンサートホール サーカス・曲芸 街頭パフォーマンス	歌舞伎、能、神楽、歌劇、主役・脇役、オペラ・ミュージカル、衣装・所作、マジック・手品、大道具・小道具、配役、作法、舞台、演技、曲芸、サーカス、道化役、曲芸師、演歌、歌手、芸能人、民謡、芝居、オーケストラ、ソロ、合唱・合奏、演出、シナリオ、作家、幕間、人間国宝、無形文化財、仕掛け、カラクリ、パントマイム、操り人形、縫いぐるみ、ギャラリー

度”や科学技術の大きな発展と不可分であることを、いみじくも立証したことにもなる。分野的拡大を展示にも反映させることが、社会的急務と解されたためであろう。広い土地に、という制約を外さざるを得ない上野公園の名称もゆかしい“場”として、実は一帯が恩賜記念動物公園、美術館、歴史館、演劇ホール等々の、いわば博物館等の公共施設域として、東京の文化都市の中核であることを示す結果にもつながったのである。

それ故に、科学型博物館と自然型動物園とはその長い歴史を誇ると共に、出発時点では未熟だった公園への、博物館・園諸施設の機構と連携とを目指せる知的世界の中心ともなり得たのであった。しかも、そこに歴史系・美術系・演劇系を含む博物館群も存在し得、皮肉にも敷地として文理融合博物館類の併存となったのである。この一帯は、しかしながら、内容的にはむしろ古い縦割り型となったままであり、互いの交流さえも形式だけに留まっていたというのまた、厳しい現実ではある。いずれは、本当にグローバル・ユニバーサルな仕組に変容するかもしれないし、それがニュー・ミレニアム体制として問われるところであろうが、残念なことに“都”の歴史と権威がなかなかそれを許すことになってはいない。

けれども、社会面では“制度”をも乗り越える雰囲気最近かなり高まってきていることもまた注目に値するし、むしろ社会的な市民にとってはますます身近になっていくに違いない。文系～アート系での施策・施設も、先述の例でもわかるように、“地域性”を優先させることを介して、ミュージアム群としての新しい意義さえ形成されようという途上にある。理想としては、“博物館都市”～“ミュージアム・フェデレーション”の実現を旨すべきであろうが、外国と比して面積事情と歴史性から、新規の開発はそう簡単ではなく、一種のユートピア発想で止まってしまうのかもしれない(濱田, 2004)。

ユートピアには実現性が全くないのではなく、それを支えるべき地球市民の社会的立場もまた大きく関わってくることは言うまでもない。その意味で自然史(誌)的博物館と公園とを一ヶ所で実現しようとした茨城県の例は高く評価されよう。正式名称は「ミュージアム・パーク茨城博物館」であり、初代館長は上野動物園の園長を経験された大ベテランである。近くには自然豊かな池も敷地内にある。野外での生態観察もできる便利さが工夫されている。

アート系博物館となると、旧来は文系に近いものと解され、どちらかと言えば個性がとくに強く、コレクションもさることながら、上演その他の演舞場的な場を施設にもつ場合も少なくない。能舞台がその典型といってよい。能には能特有の面と衣装・所作(作法)があり、昔は宮中で演じられたもので、その歴史性・伝統性は日本文化の一つと目されている。能にも流派があり、それぞれの地域特性もある。しかし、えてして一般的な交流というよりは観光要素が強く、融合・癒合とは一線を画さなければならない事情もある。海外の実例でよく知られているように、博物館での説明担当者が伝統的古典衣装をまとうていたり、調度品・家具まで“参加”させた寸劇を当時そのままに再現できる場合も揃っていて、地元の子供達に歴史の重みを伝える

術が未だにあることを想うと、わが国の“良い意味での”閉鎖性・独自性と文化背景の違いが大きい。

さて、アート系という中には、幅広く景観要素がもり込まれていることが少なくない。博物館ならずとも日本の寺社は、立派な博物館としても十分に成り立つ由来をもつ(濱田・青木, 2003)。しかし、制度的には、例えば“庭”のように石・砂や草木の“適正な”配置あるいはあるルールに従った配置は、かりにそれが枯山水(かれさんすいとも読む)であったりミニチュアであっても、伝統という価値は決して低くはない。寺社には、歴史性を強調する寺社林さえもあって天然記念物も少なくはなく、“自然との調和”を主張し、地元市民からはそれなりの敬意が払われていることを考えても、博物館との市民との関係は決して乖離してはいないと言えよう。

では、話を少し現代へ戻して考えてみよう。現代～近代には、建築とか街づくりについていろいろの立場や環境整備が課題となる。都市や開発について、日本には歴史的なもののある程度尊重するという以外に、ビジョンや構想が極めて乏しいことは誰もが認識できることであり、景観上も全く同様で、制限は“あって無きが如し”の態である。ただ、室内施設等についてはレイアウトという形式を重んじ、事例もあげ得る手法に加えて、“採光”とか屋上や壁面の緑化という要素も加わってきていることは指摘されて然るべきであろう。採光には自然型と人為型に大きく分けられようが、採光と景観とは密接な関連がある。伝統的な日本式家屋・庭園では、それが一層明白である。

さて、博物館と動・植物園との関係で、広義のレイアウトを中心に考えてみよう。植物園には様々な実物展示があり、それらを大分類し生態系として観られるような演出もできる。動物園と博物館との関係は、夜行性動物館、鳥類館、爬虫類館、昆虫館等々、これまた多彩な局面をもつが、ほとんど常に動態飼育～栽培となるので、一般の標本展示施設とはかなり質を異にする。国外ではかつては動物園の一部として水族が飼われていたり、爬虫類館に恐竜が復元されていたりした場合も、発想は同じでも効果という点でそれぞれに特性があって、特別の展示博物館にまで発展してきた歴史的経緯は判然としている。

動・植物園と公園～博物館は、本来敷地さえ許されるなら、“統合博物館・園”としてテーマパーク仕様の計画が立てられるのが筋であることは言うまでもあるまい。まして、放し飼いのための広い地域、あるいは小屋とか飼育舎といった制約もなく歩きまわれる動物達にとっては、あるいは植物の栽培であっても、地区に限った繁殖・生育が可能なら“生きている”という“自然のしくみ”の一端を体感させることには非常に大きな学習効果がある。例えばサファリパークなどと呼ばれるものであろうが、自然花園と名付けられるものであろうが、野に置かれることのメリットは計り知れない。

動物園施設が一番面積を必要とすることは言うまでもないが、一般に“常設”が主体となることは仕方あるまい。これに較べると、植物関係は野外施設として樹木園とか水生植物園等々があるが、面積はそれほど必要としない(奇跡の星の植物館「友の会」, 2003)。その代わりに、屋内型

表 4 . Artsを視座に据えた調和・融合dynamicsの世界

		研究分野事例	項 目 の 例 示
智 心 的	スピリチュアリティ	理念学 未来学 平和学	夢を抱く、ビジョンをもつ、理想を追う、信仰する、倫理を問う、動的心理、真理、性の超越、善と禅、無我の境地、天国と地獄、迷信、宗教力、超能力、第六感、心霊術、美と想像・創造の世界、霊の世界、21世紀への抱負、四次元の世界、死後の世界、生命力、煩惱、宇宙と認識、トラウマ、人類皆兄弟、天上天下唯我独尊、座禅の世界、「若人よ大志を抱け」、正論・正義、インスピレーション、フィラントロピイ(博愛)、ユニバーサル思考・志向、儒教、イスラーム、論語、仏教、神教、キリスト教、人間の欲望、オカルト、一神教—多神教、理念
	文化とメディア	文化誌学 文明学 情報科学	文化的水準、差別、自由、正論、同志、協同、共生、異文化理解、標本の価値、ユネスコ思想、公益性、適切なメディア、分野・分類の階層性、ノーベル賞を代表とするグローバルな褒賞等、同調性、自分史、進化の思想、相補性、知性、進化論、メタファー、パラダイムの転換、価値観、あくなき欲望、思考の多様化、起源論、哲学の不在、文化的世界遺産、文芸活動、音の世界、美醜の評価、文化財の保存、gene bank、遺物・遺構・遺跡・化石等、伝承、栄枯のコンセプト、黄金分割、コミュニケーション、ユビキタス、文化力、パースペクティブ、メディアミックス、活字・電子媒体、ディシプリン、アーカイブス、創意・工夫、虚構、インフラ整備、新機軸、ニューミレニアム、先見性、ハッカー(VW)、匠(たくみ)の業、日常性の科学、IT世界での活用、ディセミネーション、メディアリテラシー、マンガ・アニメブーム、レトロ、質的評価、ブロードバンド(高速大容量)、マニフェスト(政権公約)、アルゴリズム、知的財産、システム(思考)、時空解析、個と集合、相互作用、コンテンツ政策
	教育と楽修	博物科学 総合科学 レクリエーション科学	教育システム、楽修システム、フリースクール、コミュニティスクール、制度教育、インベントリー、同定、曼陀羅センス、学校制度、教育特区、教育委員会の在り方、独立行政法人化、大学院制度改革、ハンズ・オン、ユニバーサルミュージアム、公園・博物館・動・植・水族園等公共施設、体験学習、エデュテインメント性、ものづくり、ワークショップ、五官と体感、展覧・博覧会、なぎさ、民俗学的視点、ディスプレイ、展示・レイアウトのコンセプト、感動と意欲、不登校生、エドゥケーター、俯瞰的視野、公共メディア機構の利活用、ゼネラリストの必要性、産業ミュージアム、アウトソーシング、e-ラーニング、エコツーリズム(グリーンツーリズム)、スキルアップ、暗黙「智」、屋上緑化、校庭ピオトープ
	個と社会の健康	介護学 健康科学 人間科学	心の健康、意識の向上、長寿、自己管理、フレンズ、共感、テロの脅威、人口爆発、少子化、生活習慣病、生物兵器、疾病、抑圧と開放、相互理解、心身の鍛錬、介護の精神と制度、安心感、本能、院内感染、医の倫理、麻薬、医薬分業、心身障害、健常、LD、引きこもり、癒し、慣習、自給自足、マンパワー、失望と落胆、表と裏、一病息災、植物人間、末期症状、老化と加齢、ゲイの世界、PCR法、機能性食品、感染症、インフォームドコンセント、カウンセリング、遺伝子工学、ゲノム、DNA-RNA、ホスピタリティ、連携と連帯、ジェンダー、セクハラ、社会福祉、不断的努力、深層心理、フリーター、脳死、無医村、ゆるい繋がり、漢方医療、マイナスイオン、AIDS、MRSA、SARS、サバイバル、BSE、UD(ユニバーサル・デザイン)、アルコール依存症、中期記憶、枯草剤、生体認証、サブリミナル(潜在意識下)、非行少年、里山・里海
具 象 的	環境と生態系	地球環境科学 生態科学 超領域科学	バランス、せめぎ合い、害毒、浄化作用、環境破壊、生命の多様性、景観学、ヒートアイランド、食物網、相互作用と相互依存性、絶滅、立体目次、超領域分野シナプス、進化論、水資源、自律的發展性、ダイナミクス、自然界と人為性、寄生と共生、環境圧、環境保全、絶滅危惧種、持続可能性、スロースリップ、サンクチュアリー、源流、水惑星、水域環境、自然保全、複合災害、汚染問題、ローテク・高効率、ゼロエミッション、未利用エネルギー資源、“オールラウンド・スペシャリスト”を目指して、メタ地球環境、地球全史、赤潮、焼畑、侵入種・移入種、マントルブルーム、地球温暖化ガス、メタンハイドレート、オゾンホール、3R型循環社会、SDP-ACTシステム、難分解物質、生命の発現、生命維持システム、コーゼネシシステム、分散型電源、長い眼・広い眼・クールな眼、気相合成ダイヤモンド、樹木医制度、異常気象、動態地理学
	科学とテクノロジー	先端科学 グローバル科学 安全科学	進歩と進化、改善と改良、「new to me」思考、向上心、危険・危機の予知・予防、つなみ、総合的判断、最先端科学のたどる運命、スパイラルパターン、スキルマネジメント、富栄養化、機械論と還元論、波動学、COE、科学指標、安全・安心の指針と基準、核開発と後始末問題、安全管理、計算科学、自動化、熱汚染、新幹線の進化、ロボコン、スーパーコンピュータ、超高層ビル、超音速移動体、脳波、フラレン構造、可視化手法、ダウンサイジング、ナノテク、解析力向上、核実験、VLBI、パラボラ、蓄電効率、燃料電池、ハイテク、磁気浮上体、光通信、バーチャル体験、高度情報化(社会)、治山・治水、イノベーション、デジタル・アナログ、モーションキャプチャー、ブルサーマル、ICチップ、先駆性、光触媒
	経済とビジネス	経営科学 循環経済学 実践財務学	効率、生産性、競争の世界、破壊と再建、世界不況、ベンチャー企業、ニッチ、省エネ、地政学リスク、共時性、マーケティング、プログラムの多様性、経済指標、価値観、評価の多様性、貧困、飢餓、貿易戦争、経営マネジメント、協同創造、意識の進化と社会構造、経済摩擦、各種税制、合併事業、構造改革、国際標準化(ISO)、財務諸表問題、富と財産、GDP、株価、世界不況、景気の変動、外貨、金融政策、民活、規制緩和、就職難、景気、金利、外貨準備高、乱高下、デフレ・インフレ、規制緩和、リスクマネジメント、CPI(消費者物価指数)、年金、損益、法令遵守(コンプライアンス)、ステークホルダー(利害関係者)
	政治と法律	司法学 政治倫理学 国際問題学	犯罪、規制、違法、司法、配慮、説明責任、殺人とその罪の重さ、モラル、裏取引、相続、人道支援、欺瞞・詐欺行為、刑務所、死刑問題、正邪判断、国際間調停、ジャーナリズム、時事評論、自治、テロ対策、領土問題、シーレーン、工作船、汚職、水際作戦、戦行為、宗教的対立、ホロコースト、収監、悪平等、疫病、関税、出入国管理、国際連合関連、南北問題、ならず者・ギャングの出没、改憲と護憲、南北問題、人権侵害、被害、安全保障、多国籍軍、斗争と平和、戦争裁判、戦略と戦術、事故・事件・災害、誘拐、殺人鬼、取締り、自衛権、救援活動、暴力行為、公・広・工・鉅害、治安、武力制圧、平和憲法

施設として陽当たりや温度コントロールに努力と経費がかけられている。しかし、それを克服して“飾り付け”を含めたインテリア・デザインには、著しいテーマ替えさえ可能なケースもあって、それが一つの“動態”，つまり季節や場所の違いを印象付けることにも大きく貢献している。博覧会等に附属する恒久博物館として、植物園が想起されるのは故なしとしない。いわゆる花博型イベントと称される博物館・園組織と文系・アート系とを組み込むことが可能な計画も、近年増える傾向にある点は心強い。自然系の博物館・園と文系・アート系での属性やレイアウトに一層の工夫と理解が進むことにより、必ずやより進んだ複雑系的複合公共施設が生まれることが大きく期待される。これもまた、ニュー・ミレニアムへの課題として注目する価値はあろう。

なお、付言が許されるならば、これまでのこの章での論述には動態という言葉は登場したが、“自然生態系”という視点が欠けていることは指摘されるまでもない。自然生態系の実現あるいは、その観察にとっては、野外・屋外が必要でもある。それが、いわゆる博物館・園構想の障害となっているのも一方の事実であるが、全く発想を換え、パラダイムを変換するやり方もあり得よう。

一例を挙げておこう。1991年にアリゾナの砂漠に出現した巨大ガラスドームは、「バイオ・スフィア」と名付けられ、閉じた系として物質循環を高度にコントロールしリサイクルを含めた生態系の模擬実験場であった。180億円もの巨費を投じたにも拘わらず、計画は失敗に終わった。が、それは確かに“実験”であったわけであり、失敗は成功の元という言葉の通り、次なる計画には火星での“実験”が企てられているという。しかし、酸素のない“世界”を環境にもつ「バイオ・スフィア」プロジェクトには、イージーな失敗は許されまい。

似たようなイノベティブな実験計画は、フィールドをうまく利用することで、プラスにもマイナスにも、いろいろの成果を挙げ得る。ドイツでの先行する「ビオトープマップ作り」では、地図上に限なくマクロの生物分布をプロットし、何か新しい工事で不都合が生じた場合には、それを補う意味での適正なビオトープが造り出され、多様性の減少を最低限に抑えるべく、その具体策が議会上がって決定された。さすがに“森の国”として自負するドイツである。

このことを無批判に導入したわが国でのビオトープ政策には、全然的外れなものばかりでその真意は伝わってこない。校庭につくった人為的な水溜りにトンボが来たからといって、それが生態系の復元につながるわけではない（津田，2002）。似たようなことは、近年流行りの「屋上緑化」運動にもつながるが、ムードだけが先行することに一種の抵抗感をもつ人も少なくなろう。緑は確かにCO₂を吸収し、O₂を生産するし、景観的にも癒しの効果もあるうが、都市気象のヒートアイランドをなくす方向にあるといっても、ゴルフ場に多くの緑の効用を期待するのと似て、その実効性には多大の疑問がある点、反省・改善が必要であろう。

第3章「Something New to Someone」をめぐる

ia “ゆるいつながり”のもつ思いがけない“新しい”特性

社会には、ルールのもとに規制をうける部分あるいは組織・機能体と、反対にむしろ制限に関してフリーな部分、との2つがあることに異論をさし挟む者はいまい。前者は官庁系、会社系、団体系等であり、それぞれの規約に類するものを有している。他方、自由・気まますを原則とする人々には、事実上何の規約もない筈である。ただ、国家とか宗教あるいは人種というカテゴリーにはこうした発想が通じないことも多からう。

事の善悪を判断するのに、一定の規律をもつのが“常識”であり、そこに倫理という、法律を超える概念規定も入ってくる。例えば、一夫一婦制という、生物社会には普遍的ではないとしても、現代ヒト社会にはしっかりした約束事がある。原始的なヒト社会には、動植物と同じレベルであることが前提となっていて、決して一義的に男女の性差が通用したわけではない。時には性転換も起こりえるし、今日は♂昨日は♀という雌雄同体で2役を演じる場合すらあるうえ、それ以前の問題として性別のない体分裂で増殖していくことさえも決して珍しくはない。

ふつう、このような男女の性別は、ただ単に生殖機能が働いているかどうかではなく、本質的な生理作用、あるいはその名残として器官が認められるだけのことすらある。例えるには身近すぎようが、ヒトの男性の体幹にある乳頭など、なぜと問われて答えに窮することになってしまう。つまり、ヒトのレベルでは、ヒトとして機能する以外に、雌雄同体であった頃の特徴の名残がいくつもある例だということである。

そのヒト社会に、あまり通用しないような倫理概念を持ち込むと、事がややこしくなってしまう。ゆるい関係というのは、心理的・心象的な社会事象として捉えておくのがよい、とすることが許されるならば、ここで取り上げようとしているヒトの状態を理解することは容易であろう。そもそも、社会的にゆるい、というのは生理的に、あるいは社会構造としても意味の大きい親族関係等とは全く別に、一般社会でいう赤の他人同士にも、同じ考えであったり、同じ好みであったりすることも多い、という生態を考慮する必要がある。

社会では、大きくみて利害関係とかあるいは人種同士の関係で結ばれている組織・団体が圧倒的に多いことも、事実として認められる。そうした中で、とりわけ“ゆるいつながり”という表現でくくられるグルーピングがあることもまた正しい捉え方といってよからう。しかしながら、文明化が進むにつれて、管理社会的な発想が、どうしても大勢を占めることになるのは止むを得まい。

ヒトはヒト特有の、アートセンスまで理解できることに慣れた“ゆるいつながり”を持つグループの代表格であり、博物館・園活動に関心の高い“一時的に”あるいは“その場限りがついつい”といったムードの中から、こうした“ゆるいつながり”の一群ができ、それなりの活動（その活動を通じてヒト同士が心で固く結ばれることはあるが）を広

げてゆくことさえおこる。体験的に言うならば、神奈川県西部地域の各博物館館長・館員らの結びつきであり（前出のWESKAMS）、ミュージアム・リレーというその活動はもう発足以来8年も続いているし、高校生（不登校生であるが！）を巻き込んだ楽しいグループまでもが加わって、非制度的、つまり博物館にも学校制度にも属さない社会人～市民の集合体が成り立っているのである。

その活動範囲は、実のところ西神奈川に限定されているわけではなく、静岡県や東京都にも伸びている。現在、いつも連絡可能な態勢が保たれていて、その博物館・園総数は50にも達しているのが意義深い。ボランティアなグループ活動としては、異色かもしれない。ふつう博物館・園には“登録制”が要求されるが、このケースにはこうした制約は全くない。皆それぞれ自主グループ化を愉しんでおり、生涯学習を少しでも深めようという意気込みでつながっているのであろう。

このような“ゆるいつながり”の関係は、これまでのところ先例と見られるものもなく、独り旅的存在であり、それなりの楽修（学習）＝エデュテインメント効果をそれぞれ個人のレベルでも高めており、社会的貢献としてその智のパワーには一目おけるものと許容されよう。ニュー・ミレニアムにあっての大きな展開がそこに期待されるのである。そして、それらのある人々は“博物館とそれに関わる人達”の集合体であるMFJ（ミュージアム・フレンズ、ジャパン）のプロトタイプともなっていて、最近関係筋からもかなりの注目を浴びている。

ib 考え方・着想の斬新性とその先見性、そして自律的發展性

先にふれた「Something New to Someone」でも記した通り、ヒトは誰でも、“新しいこと”に関心を持ち得る。ただ、生まれてきたばかりの幼児に対してこれをいかに問うてみても、理解されることは先ずない。つまり、ヒトには、学んだこと、体得した智慧をいつまでも脳裏に留めておくという“人間らしさ”が具わっていて、その能力は無限の発展性を持っているといつてよい。

“考える”という知的行為は、わざわざそう断らなくてもヒトにはごく自然なことであり、敢えて言うなら加齢に際しての“頭の体操”的本能であるとも云えよう。それがある程度のところまでくれば、着想という現象を生み、斬新性・先見性・洞察力・予測性、etc. と称される、ヒト特有の知的現象（知心的と称しうる）性格も充実してくる。これは、目的的に培われるのではなく、といって目標を樹てるわけでもなく、自然発生的に進歩し、経験を重ねることから、結果として自律的發展性という性格を具えることになる。

このような思考の進化にとって、制度教育はプラスにもなるし、マイナスにも効果を生み出すこともある。基本的には、日本の場合、限られた“教育期間”内にできるだけ効果（進学というケースが、社会人のパスポート取得と同義に解されている不幸な事態）を上げようとして、6・3・3制に代表されるような厳しい制約（時間とカリキュラ

ム）を課し、いわゆる“指導要領”型の硬直した“石頭”づくりに邁進することもまもあり、マイナス面の典型と言える。

その一方で、常識的な教育課程に馴染むことに不得意な“能力あるヒト”は、天才教育、英才教育として更にまた別の“縛り”を受けることになり、結局は不登校化してしまう（大越，1999）。人気スポーツについても、また然りである。そうでなくとも進学率を上げたい多勢の人達は、ふつう正規の勉学の他に塾とか予備校で一層の磨きをかけるべく“豊かな常識づくり”に熱心となる余り、肝腎の“常識”は、知識の切売り商売ないしは提供母体と化してしまう。両親が“教育熱心”であるばかりに、心の隙間につけ込んだ“常識外れ”を生み出すケースが激増している。

このような知識レベルの詰め込み主義は、定着した学校教育にその根源が求められることは明らかであるとしても、その中の幾名かのエリートが、政治・行政の世界で幅を利かすようになる局面が多いのも問題である。ただ、誤解してはならないのは、どんな大物でも特技を持つこと自体に、実は本質的価値が発生するのであって、わが国での“偉い”と言われる大多数の人達にはそれを欠くことが多いのは残念である。国の長い管理体制が生み出した本当の“能力主義”からかけ離れた、特別な知識に欠け専門性でも認められることがないような要職人物の存在には、“来るべき”ニュー・ミレニアムに向かって、できる限り改善されるところがなければならぬまい。

近年のように技術革新のスピードが極端に大きく、なりふり構わぬところで先端性を問われたとすれば、答の出せないケース、予測できないから等の理由をつけて、暫定基準をおくことになる。そのような場合、早まって過ちをしてしまう最悪の事態等々、いずれも成果を少しでも早く、という追いかけられる心情とそれを共有し是とする社会では、とりわけ注意が肝要である。“総合性”とよく云われるケースでも、実のところ多くの下請け業者に任せっきりの“非総合性”そのものが暴露されることも屢々であり、どこでその責任をとれるのかで、長期係争となることも多い。

幸い自然史（誌）局面には、そうした成果志向は少いと考えられていたのは、20世紀型自然理解であったと、強く反省しなければならぬまい。その証拠として、“人為”の影響は、いまや全地球、水域にも大気にも及んでいて、いわゆる自然、これを原始自然（真自然：プロト自然環境）と呼ぶとしたら、現代にはもうそのような部分は全く消え失せて、急速な人口増加（爆発という表現のほうが正しだろうが）につれ、自然は変質し、メタ自然環境と呼ばれる運命となってしまったと言えよう。誠に残念ないきさつであるとしなければならない（窪田，2002a）。

ii “落ちこぼれ”への評価と教育特区問題

近年、教育界では、落ちこぼれとか理科離れ、科学嫌い、不登校、キレ易い若者、非行青少年、等々、非常にネガティブな反応を思わせるマスコミ世界中心のムード用語が横行している（高瀬，2004）。一つの社会的側面としてこれ

表5. 博物館政策の基本構造

範 疇				事 項 例	基 本 課 題
博 物 館	施 策 ・ 運 営	方 針 決 定	社 会 判 断	・ニューミレニアムの日本博物館界での位置付け ・グローバリズム視点から見る地域社会でのニーズ ・財政と行事等とのトレードオフ ・内部・外部評価の正しい受止め方	正確な情報分析とそれに基づく先見の明が不可欠
			理 念 ・ 構 想	・知的公共サービス機能体という認識 ・非制度学習の正しい役割と在り方 ・エデュテインメント思考への理解とその浸透 ・ユニバーサルミュージアム化への努力	館独自のディシプリンないしはコンセプトが見え難い状況の打破
		管 理 ・ 運 用	組 織	・「合理的運用」のための理想型の追及 ・館長を巡る人事・権限・処遇等 ・「学芸員」の分野・員数等の合理性検討 ・大学院組織等への関与が課題	個人の意識向上と館内コミュニケーションの確立が先決の大問題
			広 報	・館員の活動が広報の主体という理解 ・各種ネットワークの有効活用 ・現代的マルチメディア型広報の重要性 ・子供達の視点・発想の重視	独立行政法人化時点で、ノウハウ・能力が早速に問われる
	行 政	館 の 内 部	意 識	・大学・研究所での学術との相違に理解を ・学界への貢献と館への寄与とのバランス ・コレクション重視策とその活用度への評価 ・「e-モノグラフ制作」が博物館の使命という意識	国の文化政策見直しも必要だが、館員の自意識変革が先決
			展 示 ・ 解 説	・特別展・企画展等の質と頻度 ・顔の見える学芸員・エドゥケーターの解説制度 ・レピーターの実態とその望ましい在り方 ・ボランティアの正しい理解と役割	持ち回り展等を含め、長期計画としての魅力ある行事策定を
		ア ウ ト リ ー チ	学 習 支 援	・知的好奇心の高揚策としての諸演出 ・ハンズ・オンの適切なアプリケーション ・制度教育とのマッチングや教育特区の補完能力 ・過度のバーチャル化やAV機器使用への配慮	広義の生涯学習のための、自由度の高い学びの場の提供や「友の会白書」の可能性
			地 域 貢 献	・学校5日制、総合の学習等の受止め方 ・住民参加には子供が主役で ・近隣館・園等との連携 ・サロン型文化的事業の活性化	地域特性は画一性と相容れない現実都市型・地方型の明確な認識を

を客観的に捉えるならまだしも、さしたる理由もなく、あるいはある種の“仮定”と“家庭”とに根をもつ発言と、それが持つ少なからぬ影響力には、いささかの反省が必要となろう（濱田，2002c；下村，2003）。

もちろん、これらの諸事情に対してはそれなりの理解を示しながら説明責任をとれる若干の人々もいて、心強いことは承知のうえでの立論である。このような発言には、それなりの正しい理解が普遍化することが大切であるのは言うまでもなく、マスコミというメディア機構から外れるような世界に根拠を置き直して考える必要があるのは自明のことと言えよう。

中でも、言葉自体に不思議な点があるのは、不登校生の主体をなすと考えられる“落ちこぼれ”と呼ばれる場合である。自然現象ならいざ知らず、もし人為の世界についてこのような現象が起こるとしたら、一体それは何なのであ

ろう。言語として不登校が付き纏うとはいえ、学校という制度上の縛りからはみ出して進学もできない人々に対する、一種の差別的用語ではないだろうか。とはいいいながらも、現実問題として何から何が、誰が落ちこぼれたのであろうか、という疑問の方が先に立ってしまう。

調理関係や地質・土質調査の際には粒の大きさを揃えるのに篩という道具を大事にする。一般に、社会で篩にかけられる、という時は、どうしても粒の粗い方が無駄なもの、よくつぶされた細かい粒子がそれなりの意味を持つ、と解されるのが常識というものであろう。それなら“落ちこぼれ”というのはどうして悪いのかと問われて、篩にかけられて下に落ちるのが良い粉だ、と自信を持って答えられる人が本当に何人いるのだろうか？

篩で分けられ、残った部分の方が粗くて不均質であることの方が圧倒的に多いのであることを認めるならば、なぜ

“落ちこぼれ”なる言葉と直結するのだろうと誰でも思うのが正直な筋であろう。つまり、篩にかけて、残り渣こそが爪はじきされ、捨てられる運命にあることとなる。もっとも、土木関係者にはそのような価値観を超えての評価があり、粗いものは粗大なものとしての別の使い道が用意されているケースが多いことは付言しておく必要がある。

となると、篩で落とされるのも残る方も、どちらにも“マイナス・イメージ”は無いのである。これが常識的といえる現象であり、“落ちこぼれ”なるものの実態は、成績(出席点を含めて)の悪いものを“落第”と見なす、教育界での“用法”に引きずられて、クラスから落ちて枠外にはみ出した人々、という定義にほぼ見合っている。つまり成績至上主義での一種の差別扱いであることが明確で、心理学界での最近の用語としてLD(Learning Disability学習障害)なるものとかADHD(注意欠陥・多動性障害)のような差別化を示唆することにもつながりかねない。つまり、一定の基準に合わないという理由になるからであろう。しかし、教育上、一定の基準となるものは何であるかを判然とさせるには、学術用語を使ってもできない場合も多い。特殊な才能の持主の一群は明かに学校へ出ないケースもあるし、英才教育が成功すればともかく、はるかに多くの人々が陽の目を見ないのが、エリート集団をみざすところなのである。例えば、音楽の試験で一般的に良くない、と評価されるのと全く違い、プロにはプロなりの資格が必要で、時間と“勉強”(技術的)でそれが達成されたごく少数の者にしかその栄誉は与えられない。

といって、プロ向きの検定に落ちた人は本当に能力がないのかと問われれば、これは一つの感性の世界であり、実力は紙一重というケースもあろうし、一方ではパスして他では落ちるという場合もまああろう。話題を一般的な制度教育に戻して考え直してみよう。成績は明かに、出席日数と試験という二つの関門を、“幸運にも”くぐり抜けた“平均的”“常識人”と評価される者に与えられる「特権」であることは、誰しもが認めるところであろう。とすれば、試験はそれを課す側の理解の程度によって、実は落ちていても、他の行状から情状を酌量されることもあり、ふつうは何とかなる。しかし、不登校生というレッテルがつくと、試験すらも与えられず、教育の場から様々な理由が付されて、検定や査定の対象とされることもなく、“不登校”という実績故に“振り落される”のが実情といってよい(濱田, 2001c)。

エリート集団に課せられるテストでは、正しいかどうか判断されるのでなく、まさに“最高の”成績取得者のみに名誉が与えられ、それ以外の全ての人達は涙をのむのである。一方、最近の研究では、一般的な通学生より、家庭で教科書を親がこなして“家庭教育”をほどこすホーム・スクールが、フリー・スクールという一般名称の中に位置づけられ、その生徒の方が実は社会性をはるかによく持っている、というショッキングなレポートさえ出ている、アメリカでの教育界の在り方に一石を投じている。

ふり返ってわが国でのフリー・スクールを見るに、ここには様々な様態・方式があり、フリー・スクールで皆出席という笑えない現象さえおこっていて、その塾や集団の在

り方を根本から問い直す動きもある。ごく最近の例として、政治・行政の世界で推進することが“義務”付けられている“教育界”にもその発想が組み込まれ、文科省指導を得て新しい民活型の、非制度学習に踏み込む例も少ないながら出現してきたことは、ある意味で旧来の教育界を見直すきっかけともなり得るいわゆる教育特区の世界であり、自治体や企業からの民活的規範の構築が課題とされるようになった。

これまで、“不登校”のレッテルを貼られて親子共々悩んでいた者達にとっては、少ないながらもようやく陽が射し始めた、と評価することもできよう。ただ発足したばかりなので、これからの様々な“学校”の在り方そのものも参考となろうし、時には力及ばず再発という事態もまたあり得る。いずれにせよ21世紀型の教育界の改革が始まった、と前向きに捉えておきたい。

例に出してよいと思われることがいくつもある。社会的に“落ちこぼれ”という言葉が、考えようによっては「差別」と受け止められ易いので、新聞等報道の中では極力使ってもらいたくないのが本音と言える。本来、学校のクラス編成は文科省の「教育指導要領」にほぼ添った形で動くと思われるので、テストや内申書等による評価判断が下され、“不合格”となる場合もあろう。そうでなくても“不登校生”の多くは、学校に行かなかったり、クラスに出なかったりで、評価のしようがないこともまああるだろう。クラス担任、学務会議、学校長との相談等々も必要であると思われ、“不登校”の実態把握には、むしろ標準化に順応できない生徒が多様な理由で存在することから、一概にLDとかADHDのような“病名”を与えてしまうのは、本人や家族・友達関係にとっても決して望ましいことではない。

学校の教師の裁量にも問題があるのかもしれないが、家庭の実情にどこまで踏み込んで調べているか、多分に不安な要素も残る。度々報道されている“親”の子供虐待についても、全くよく似ていて、本来ならこちらこそ“問題児”に相当するという判断を下すべきではないだろうか？逆に、不登校生だと堂々と言える子供も結構いる。その良い例が、父親の与えた本やワープロにすっかり虜^{とりこ}となって、学校へも行かず夢中で書きまくったと告白する芥川賞受賞の女性である。同等の評価を与えられたもう一人の女性は一つ年下であり共にマスコミでも受けていて、けれん味がないところなど好感を持てる。

親とのコミュニケーションが程よくとれている子供にとっては、これらの例でも明らかなように、不登校はさして問題にはならない。逆に“英才型”として評価されても一向におかしくはない。世間でよく言われる“引きこもり”は、一寸事情が違っていきそうである。親に対しても自閉的になっているケースだから、余程のことがなければ学校には通うわけではない。引きこもって何をどうしているか、で将来が決まることにもなり兼ねない。

自閉症という名称も良くないのであるが、医者に言わせ、診断を求められれば、何らかの“欠陥”があるのが当たり前、とする場合が事の多いのが実情である。だとすれば、むしろ“在校生”になった時から「性格判断」を採

り入れるなど、校内制度の強化を図った方が良いとも云える。しかし、受身になった者や教師の立場からは、もちろんかなりの反撥も予想され、結局はズルズルと長休みをさせてしまうことになるケースも多かろう。

世の中では、近年 塾とかフリー・スクール型の組織に親子共々憧れをもつ（持たされる）場合も多い。進学オンリーで共にそれに掛けてしまい、パスポート獲りに夢中になるケースは少なくない。もちろんIQ的にはトップクラスなのであろうが、「知識」を詰め込むだけではいずれ先を伸ばすことなど期待できまい。前出のようにアメリカのある実験では、ホーム・スクール制をとって、親が学校の用意する教材を使って子供の教育に当たり、その子と学校のクラスの子を比較して、むしろホーム・スクール教育の方が社会性に富んでいる、という予想外の結果さえ出されている。

フリー・スクール型学習での素晴らしさは、まずは“遊び”を大変重く見ていること、強制でなく、自由な学びで“得意な科目”に夢中になれることにある。もちろん、「教師陣」にはそれなりの“アドバイザー”役が付き、個人指導までやってくれるケースが多い。つまり、これと見込んだ点に特技を発揮できるようリードしていくのである。しかしそこには、制度教育では殆ど顧られていない点、換言すれば“教育”を転とするレベルの人達が集まりがちであり、あまり工夫を凝らすことなく教科書通りにカリキュラムをこなす“転人”になり果ててしまう場合が非常に多いことには、反省、いや猛省の必要があろう。

ある児童用テキストによれば、人間は5才位までにさまざまな能力を見分けることが十分できる筈だという。わが国では5～6才は保育所か幼稚園の段階があり、この頃を最も重視しなければならないという意見と大きく食い違ってしまう。このことは、これからの日本をしっかりと考える上で無視できぬ重大なことである可能性を示唆するものである。一般生活でも、言語や“文法”、美しいものへの感動などはまさにこの幼児段階が大切なのである。いくつもの実際の体験談（教師側の）が報告されている（兵庫教育大学附属教育研究会、1984）。文科省の画一性から外れたところに早々と道を見出す具体例は尊重されてしかるべきであろう。制度上で保育所・幼稚園の一日も早い一元化が期待される。

ごく最近、国の施策として構造改革特区があちこちで話題になり始めている。農・水産業から行政、商・工業等々非常に対象幅があり、特化事項の一種の規制緩和策である、と解してよい。規制緩和とは言うものの、いくつも要件をクリアーする必要はある。その競争はとても激しく、公レベル（つまり地方行政）での“指導”でどこまで“自由さ”（自助と自律の“ルール”）が本当に獲得できるか、発足後2年目のこれからの課題である。

改革特区の中には、「教育特区」も含まれ、多様な自由度の展開が模索されている。教育特区の特徴として、一応小・中・高生の集団学習や体験学習、“遊びの時間”の設定、放課後活動、課外活動、家庭内活動など多岐に亘るアイテムをこなさねばならない。私立校という枠の中でのことではあるが、従前の制度とは一味違い、財務的な努力も

考えなければならない。

問題は、教育特区ではいかなるビジョンをもち、いかなる手法でリードし、いかに技量・学力を高め、社会人としての心構えをどうとれるか、という難題を抱えたことになる。しかし、それらにはあくまで自律性が要求されることには論を待たない。“フリー・スクール方法”を十分に理解し、教師陣がどこまでコミットでき、どれほどの成果を挙げ得るかが、厳しく問われることにはなるであろう。両親・保護者の理解も不可欠であろうから、今後は教師・両親・保護者・社会が一体となった統合的な努力が大いに期待されるのである。一方で、経営の手法と手腕とが問われることになるのも確かである。

iii 総合的動態把握こそが、生態理解 - 展示の本質

これまでの学校教育とか学習という行動には、結果が重んじられる、とする傾向が強かったことを否めまい。一つには、理念的な部分の進行状況には大変把握しにくい部分が入ってくるからであろう。そこで、論議を学習、あるいは“生涯楽修”の線まで引き戻してもう一度考えてみることにしよう。

一般に、社会事象としての進歩とか改善・改革には具体的な、しかも可視的に確認できる要素が必要となる。数値的というより、質での向上等を“非数量的”（＝質的）な視点で捉えることがより大切だからである。その意味において、学習（楽修）には“物”を対象に選ぶことが不可欠となる。もちろん動態的と称するからには姿形のみならず、継時変化もまた大事な観察・評価点であるとしてよい。

具体例を、大学での博物館展示に焦点を当てることで説明してみよう。東京大学教養学部では、かつてゼミの一環として、「生きている化石研究会：略称WOLF(Workshop on Living Fossils)」という名称のグループが中心になり、駒場祭の記念行事に、「生きている化石展」を開催した。大学生中心の活動であったから、単なる形態・分類の説明だけではなく、判る範囲での生態の動きを観察し、解釈する努力が重ねられた。今から考えるともう四半世紀も前のことであるが、飼育実験という視座をしっかりと保ちながら、さまざまな説明が試られたのである。

メンバーは20人たらずではあったものの、これまでにない観察記録が沢山得られ、「生きている」の効用を重く捉えることに成功した。駒場祭の行事期間だけの積りであったが、意外な展開にすっかり魅せられた学生さんが多く、ゼミを“不法にも”2ヶ年に亘って開く破目になった記憶が鮮烈に残っている。今でいうハンズ・オン実習であり、まさに“先駆的”事業（授業）となったことは言うまでもない。卒業後もこの特異〔得意〕を活かして月に一度は集まって議論し、旧交を暖めることになっている。出席者数は年々僅かずつ減りながらも、このWOLFグループには“不思議な”再生力があるらしく、次々に新メンバー（含高校生）が加わり、また子供も生まれるなどして、今や50人規模にまでふくれ上がったことは、何よりも実物観察と実体験の学習（＝楽修）効果がいかに絶大であったかを示

すことにもなった。そして、彼らの中から現在国公立の博物館関係者が10名に達する勢いとなったのは嬉しい。がしかし、それは予想だになかった事態である、と告白せざるを得ない。ちなみに、教養学部の学生時代、つまりジュニアでの2年間の経験はそのまま、各自思い思いの専門への道を歩んだ挙句なのであるから、もって銘すべしであろう。

別の例を個人としてとり上げてみよう。化石にのめり込むよりは“生きている”ことを活かしたい、という本人の希望もあって、水産学部へ進学した人がある。当初のテーマは手長エビの24時間観察という、とても風変わりなものであったが、徹夜の代わりにハンディ・ビデオの長時間記録に挑んだのが、意外な結果をもたらすことになった。ふつうの人は、手長エビなど日中に籠などを使って採るだけで、夜間何をしているかなど考えてもいなかった。指導教官もこれには全く驚いたというが、夜間に共食いをしたり、捕食したりする様子がしっかり撮れていたのである。

この研究で無事卒研を終えた彼女は、東大付属の海洋研へ院生として移り、イカ・タコの生態を扱うことになった。もちろん、行動観察とそれに対する考察である。今度はビデオだけでなく可視化をめざして超音波や軟X線等を駆使して、より科学的なデータ取得に努力した。その結果、頭足類の“呼吸”には逆流防止の弁があり、見事にポンプ役を果たしていることが示され、国際学会で論文賞を得る結果につながった。本人の弁によれば、マダコはとりわけ形態の描写が難しく、興奮したり、岩や砂にかくれているときには、身体を実に上手に擬態したりし、観ている方もすっぴんのまれてしまうのだという。産卵行動にも多くの不思議があり、海藤花^{かいとうけ}という房状につながった卵塊を抱えるようにして守り、稚仔として放出する様子を、タイミングを見ながら、また撮影時にマダコを刺激しないように工夫しながら撮ったビデオは、まさに驚きの連続であった。動態の素晴らしさを、心ゆくまで味わったことになる。それをきっかけに動形態学(dynamic morphology)という分野を開拓し、命名することになったのも大きな功績であった(Tateno and Hamada, 1993)。200年余り“固定”が本当の姿とした固定概念を、一気に3D動画像として捉えたことは本当に素晴らしい。

続けて同じ人物の話題となり恐縮であるが、海洋研から東大教養へ戻ってきた彼女は、多彩な能力を適切に発揮し続けることとなる。例えば、海中生物としても「生きている化石」としても代表的な、カブトガニの観察・考察・実験にまつわるものである。特別天然記念物としてあまりにも著名となった岡山県笠岡市では、もう天然の個体を滅多にみることができなくなってしまった。それを機に、彼女は学生・院生を連れて九州は国東半島の杵築まで足をのばし、タコ以来親切にしてくださるプロカメラマンとプロ(ビデオ)カメラマン父子の手を借りながら、カブトガニの“産卵行為”を詳に調べ、院生達の協力もあって卵から一令幼生～五令幼生くらいまでの期間をとりあげ泥まみれになりながら活動を続けた。

その甲斐もあって、産卵場所の条件や親になったら別の水塊(深所)へ移動すること、などを次々に明らかにして

いくことに成功したのである。親の行方については、深みに潜って行ってしまうことが判っただけで、甲羅に装着した無線装置の効く範囲外に出たことが判明した。それにしても、例のカメラマン父子が、ファイバースコープを足先で操り、的確に産卵シーンを捉え得た時には快哉を叫んだものである。スローにしても画像が止まらないその速さには、全くの驚きしかなかった。まさに世界初の快挙である。ちなみに、カブトガニ類は世界中で6種しかいないとされるが、成体はいつも雌を雄が抱えるように連なって行動しているのを、これを産卵(交接)と捉え、砂から泡がモコモコと立上がってくるのを産卵泡と呼んで行動に直結するとしていたのは、まったく見当違いであることが判ったのも大きな成果であった。

日本各地、とりわけ岡山県から西寄りの各地では、現在カブトガニ保全の運動が盛んであり、九州のあちこちの干潟で産地が詳しく知られるようになった。ただ、ニュース等で報じられる“産卵泡”は、実はそうではなく、空気を粒子間に包み込んだ砂をかきまぜることから生じる攪乱泡であるというこの実態はまだよく理解はされていない。親の生息域と稚仔の分布域に大きな差があり、中間の大きさの個体の行方が依然として特定できない点など、残された課題は多い。

動物や植物の分類基準には、機能形態として捉えられることが圧倒的に多いが、動形態学のように、体験・体感し、しかも新しい事実を適確に探り当てることは、これまで全くなかったものであり、その研究発展に対する研究業績は称賛に値しよう。大きく言うなら、学問の発展は実はこちらであり、静的形態学には顕著な限界が含まれることを明らかにできたその功績は決して小さくはない。

第4章 あとがきに代えて

—物事には、表と裏という“対立的”～

“二律背反的”傾向の存在が常道—

博物館型活動には、多様な背景と多彩な局面とがあり、例えば分野の著しい多様性、研究と調査、教育と学習、広報と普及、サービスと自主活動、etc. の、“二律背反と目される傾向”あるいは“対立的傾向”が挙げられよう。このような事柄は、別の切り口から見れば、事象の表と裏であり、博物館・園という存在が制度教育としてではなく、自由な学習としての“複雑系”生涯学習機構でもあることを能弁に語っている。

それ故に、博物館型活動には、必然的に広領域の視点や俯瞰の視座が要求されるのである。これを個人としてどの程度こなせるかについては、まさにその個々人の趣味・意識・見解・視方等の違いに大きく依存しており、一概に論じ難いことは間違いない。ただ、常に総体的な把握と総合的な理解が不可決であることは明々白白であり、そのような学芸員・専門家・研究者が、館・園という組織の中であってどう振舞うかは、館・園の主張・ビジョンの一部であることもまた確かであり、結果としてそれは館・園の評価につながる。

学校・学級組織とは本質的に異なり、あくまで自主的な学習体系をとるべきであり、したがって学校の教師とも明確な一線を画す必要もあろう。ただ、クラスから外れた教室外の自由活動にあっては、リーダーでもあり親でもあり友人でもあるという自覚を強くもつことが大切であろう。欧米の博物館先進国とは、また一味違ったテイストがそこから出てくることは十分にあり得よう。もっとも、制度でないからシステムは不要、という結論にはなるまい。

本論で強調してきた博物館活動には、大きな目標が存在するであろうことは、すでにまえがきに代えて、の中でふれた。それを繰り返しても仕方がないことは十分に承知しているが、敢えて再記し強調しておこう。大きな目標とは、ゼネラリストの立場の重要性であり、また、現代とは、全ての局面に規制緩和策が打ち出され地方分権や民活の方策が重視される時代、つまりニュー・ミレニアムへの入口でもあり、そこには社会における公益性という、ユニバーサル思潮をおく立場がある（濱田・奥野，2000；奥野・濱田，2000；田口他，1999），と見たいのである。

言いかえると、“ただ一つの生き物の棲める惑星” - 地球 - の尊さを、何とかこの3つの視点を軸に正しい軌道にのせたい、という願望であり、少なくともそれへ向けての運動・活動が、一般地球市民からの理解ともつながり、教育もさることながら、楽修（学習）という形態をとる中での実現を願うのである。生物自体も一つの立派な複雑システムであり、その生命はミクロの世界から超マクロ世界にまで及び、切り口もまた実に様々なものが期待でき、何とか成功をめざしたいものである。

参考文献

- 濱田隆士，1994．トークショウ「花の植物館」 濱田隆士教授退官記念論集“Miracle Planetへのメッセージ”，in 酒井陽太代表（編） 濱田隆士教授退官記念事業会．
- 濱田隆士，1999a．博物館五感論．シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムをめざして—視覚障害者と博物館—」．生命の星・地球博物館開館三周年記念論集．博物館検討シリーズⅢ．
- 濱田隆士，1999b．ハンズ・オンツーリズムへの展開—生涯学習における記念物活用的一方途—文化庁月報 11．
- 濱田隆士，2000a．ユニバーサル・ミュージアムへの志向と試行．神奈川県立博物館協会会報 71．
- 濱田隆士，2000b．21世紀博物館新時代の社会的背景—激動と不安のミレニアムの初頭を読む—．博物館研究35（4）．
- 濱田隆士，2001a．日本博物館界新時代の幕開け．ミュージアム・データ 53．丹青研究所．
- 濱田隆士，2001b．エデュテインメント（楽修）性豊かな学修プログラム作りをめざして．生命の星・地球博物館開館五周年記念論集．博物館討論シリーズⅣ．
- 濱田隆士，2001c．「落ちこぼれの子」ほど素晴らしい—地球を科学する者の教育論—．海竜社．
- 濱田隆士，2001d．激変の現代河川事情．地球マネジメント学会会報．
- 濱田隆士，2002a．地球環境科学．放送大学大学院教材 8900044-1-0211．放送大学教育振興会．
- 濱田隆士，2002b．わが国における博物館型活動と地球環境科学への展開をめぐる—その1—社会構成の一員を担うものとして—．福井県立恐竜博物館紀要 1．
- 濱田隆士，2002c．私たちの川を見直してみよう．「川は歌う」八坂川副読本．SAP．
- 濱田隆士，2002d．超領域科学の扱い方—立体目次の有効性—．科学技術社会論学会（予稿集）．
- 濱田隆士，2002e．豊かな生き方を育む理科教育への期待—制度教育と学習とのミックスタイプの推進—．第35回全国小学校理科研究大会第24回神奈川県小学校理科教育研究大会神奈川大会（川崎）報告書．
- 濱田隆士，2003．わが国における博物館型活動と地球環境科学への展開をめぐる—その2—造礁性サンゴ，サンゴ礁等の生態・古生態を視座に据えて—．福井県立恐竜博物館紀要 2．
- 濱田隆士，2004．博物館特区の提案は可能か？—“生活誌博物館群”構想への夢—．日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要 8．
- 濱田隆士・青木淳一，2003．対談 小田原という“博物館”．おだわらいふ 85．小田原市．
- 濱田隆士・奥野花代子，2000．ユニバーサル・ミュージアムをめざして—神奈川県立生命の星・地球博物館の取り組みとトーキングサイン・ガイド・システムの開発・導入について—神奈川県立生命の星・地球博物館紀要 29．
- Honey M. ed. 2002. Ecotourism & Certification—Setting Standard in Practice—．Island Press．
- 兵庫教育大学附属学校教育研究会，1984．生きる力を培う学校教育の創造．日教研．
- 岩槻邦男，2003a．科学するよろこび，ひとはく通信 ハーモニー 42．兵庫県立人と自然の博物館．
- 岩槻邦男，2003b．兵庫県の自然環境—現状とこれから—．ひとはく通信 ハーモニー 43．兵庫県立人と自然の博物館．
- 奇跡の星の植物館「友の会」，2003．Miracle Press．奇跡の星の植物館友の会通信 10．
- Mabey, R. 1988. The Flowering of Kew．
- 奥野花代子，1999．博物館における視覚障害者への対応について—全国の主な博物館園のアンケート調査結果及び当館の事例—．生命の星・地球博物館開館三周年記念論集．博物館検討シリーズⅢ．
- 奥野花代子，2003a．神奈川県立生命の星・地球博物館のボランティア活動—博物館ボランティア活動の概要と「展示解説ボランティア」の導入について—．神奈川県立博物館協会会報 74．
- 奥野花代子，2003b．ユニバーサル・デザインによる誘導・案内方法の創出—「縄文時遊館」への導入のための検証を例にして—．博物館研究 38（10）．
- 奥野花代子・青木達雄・町田達也・濱田隆士，2000．地域博物館ネットワークの一形態—ミュージアムリレー運用の2年間より—．日本ミュージアム・マネジメント学会，研究報告 4．

奥野花代子・濱田隆士．2000．バリアフリー博物館からユニバーサル・ミュージアムへの展開．博物館学雑誌 25 (32)．

大越俊夫．1999．豊かな生を求めて—子供はなぜ登校拒否をするのか—．柏樹社．

Orna, E. and Pittitt, Ch. 編 水嶋英治編．2003．博物館・美術館の文化・情報資源の有効活用のために．勉誠出版．

瀬名秀明．2001．奇石博物館物語．課外授業「ようこそ先輩」別冊．KTC中央出版．

下村博文．2003．学校を変える！「教育特区」—子供と日本の将来を担えるか—．大村書店．

高瀬毅也．2004．特集 いま「学校」で何がおきているか．潮．3月号(541号)．

田口公則・鈴木智明・奥野花代子・濱田隆士．1999．ユニ

バーサル・ミュージアムをめざして．生命の星・地球博物館開館三周年記念論集．博物館検討シリーズⅢ．

田中徳久．2003．ボランティアは博物館資料の整備に重要な役割りを果たせるのか？—生命の星・地球博物館における実践例とその成果・課題まで—．神奈川県博物館協会会報 74．

Tateno, S. and Hamada, T. 1992. Dynamic Morphology of the Modern and Fossil Cephalopods. Abstr. Cephalopod Biol. & Paleobiol. Workshop, no. 29, IGI, 1992, Kyoto (Jour. Cephalopod Biology, v. 2, no. 2, Abstr.)

津田雅人．2002．特集「博物館と学校」．カルチベイト 17．文化環境研究所．

遠山 啓．1981．ひとりひとりを生かす教育—競争原理を超えて—．太郎次郎社(13版)．

山崎愛世．1991．遊びの発達心理学．萌文社．